愛知県における銭貨埋納容器の諸例

── 埋納容器の変遷と蓄銭貨幣 ──

柴　垣　勇　夫

○はじめに

昭和46年9月17日、知多郡南知多町篠島字神戸219所在曹洞宗正法寺境内から、一ケの常滑甕が発見された。甕中には、中国銭6,800枚余と山茶椀1ケが入っていた。

当時、正法寺住職名村梅綻氏によって半田警察署に届出られたが、古銭のみ、拾得物として半田警察署に、陶磁類は正法寺へ保管された。半田警察署から南知多町教育委員会を経て県教育委員会へ連絡がとられ、当時、県教育委員会文化財課で埋蔵文化財担当をしていた筆者らは、町教育委員会に対し、埋蔵文化財として容器と古銭を分離すべきではなく一括して公共施設に保管するよう要望すると共に、町教育委員会に一括保存するよう説得した。しかし、町教育委員会は、保存する適当な場所がないこと、発見者とのトラブルを避けたいこと等から、保存できない旨の連絡を県教育委員会へ行ってきた。半田警察署に対し、文化財の認定通知が行われたのち、国庫に帰属したこれらの文化財は、県教育委員会で保管するのが適当と考え、以来、愛知県教育委員会文化財課に保管されてきた。

昭和54年、愛知県陶磁資料館本館が建設された時点で、容器である常滑甕の活用方法として、県陶磁資料館での展示が最適であるという大かたの意見から、半田警察署によって密封された3,360枚ずつを入れた木箱2箱を残して、常滑甕・山茶椀各1ケと欠損銭貨75枚を県陶磁資料館に移動した。甕・山茶椀は大きく欠損していたが、昭和60年に至って、翌61年度4月からの企画展「愛知の古窯」において、常滑製品を展示することとなった。特に、常滑甕の使用方法のうち、蓄銭用という明瞭な使用形態が判る資料ということで、本例を展示資料の一つとすることにしたことから復元、伴出銭貨の整理を行うこととなった。整理の過程で、本例が蓄銭々貨の検討から埋蔵年代（使用年代）の判る可能性の強い資料であること、伴出山茶椀が甕よりも古い様相をもつことから、山茶椀に何年かの伝世があるのか、といった問題が生じた。そこで、蓄銭銭貨の整理、分類を通して、この問題の解決を探ろうとしたのが、本小稿執筆の契機である。最近、これに加えてその前後の時代のものと考えられる銭貨埋納容器の例が県下に数例知られるようになったことから戦前のもの(注1)と、これらの資料を紹介し、あわせて蓄銭容器の時代的変遷を考えてみることとした。

1.　篠島出土の蓄銭例

(1)　銭貨埋納容器（常滑甕・山茶椀）

第1図1は、銭貨6,805枚を収納していた常滑産の甕である。高さ34.3㎝、口径20.1㎝、胴径34.5㎝の14世紀代の特徴的な口縁部の作りをもつものである。いわゆるN字状口縁を形成し、巾2.2㎝の縁帯下部内側には深い空間がなお明瞭に存在する形態を示している。

外表面は赤褐色を呈し、外観上からはやゝ軟質な焼成具合かとみられやすいが、実際にはかなり硬質な焼締まり具合をみせている。

内面に輪積み痕跡が明瞭に認められ、巾3～4.5㎝前後の粘土帯10段ほどの積み上げがみられ、頸部、肩部、胴部中位の合計3か所には、一時乾燥後の積み上げが認められる。底部近くから巾

2～3㎝の表面掻き上げ成形が肩部まで認められ、肩部から頸部にかけてはなで成形を行っている。口縁から上胴部にかけて約$\frac{1}{3}$部分が欠損し、復元しているが、この欠損は採集時に古銭に主眼がおかれていたことに起因すると思われる。

なお、残存口縁部には細かい打ち欠き痕が認められ、製作後の使用痕と認められる。

第1図2は、甕内部に入れられた6,800枚余の銭貨の上部にあたかも蓋の如き状態に置かれて出土したという山茶椀である。埋納された後のある時点で破損したらしく、口縁から下胴部にかけての$\frac{1}{3}$ほどが欠損している。破損部分の破片は、甕と同様、採集されていない。

本例の破損断面部分には、銅さび（緑青）が明瞭に付着しており、甕内部に銭貨と共に長期間置かれていたことはまちがいないようである。

山茶椀の形状は、口縁直径15.5㎝、高さ5.2～5.7㎝、底径6.9㎝のもみ痕付着の高台をもつものでやゝ小形化の傾向と、高台部が低くなっている点などの特徴をあげることができる。胎土などは常滑窯における一般的なものでやゝ砂っぽい灰白色系統の胎土を示している。なお、口縁部には、焼成時の変化による炭素吸着現象がおこったようで、重ね焼きによってそれが口縁部にのみあらわれたことを物語っている。また、内底面全体は使用による摩耗が著るしい。

この山茶椀の内底部は、大きく凹みが作られており、通常乾燥時や焼成時の焼き切れを防ぐためにもうけられる指による粘土削り取りである。13～14世紀の猿投・瀬戸を含めたこの地方の山茶椀に通常認められるものであるが、本例は、なかでも極端に深くほどこされているものである。

山茶椀は、知多半島出土の常滑窯製品の編年的研究によれば、高坂4号窯出土品（注2巻末の編年ではやゝ不明瞭）にあたるが、器形変遷の上からは第二型式前期、第Ⅱ段階(注2)前半(注3)の中に包括されるタイプのものであり、推定されうる製作年代は、13世紀前半から中葉までのものである。

一方、赤褐色の甕は、自然降灰の少ないやゝ類例の少ない中甕に属するものである。古窯跡発掘調査例としては、やゝ小型ながら高坂古窯址群(注4)中の、第2号窯出土甕類と同種の口縁形態をとっている。この実年代は、調査報告書によれば、14世紀後半とされているが、構成器種をトータルに眺め編年された方法(注5)では、第三段階にあたり、14世紀中葉までに編年しうるものであろう。

さて、山茶椀と、甕にみられる年代差をどのように考えるかは、蓄銭という行為が如何におこなわれたかということにかかってこよう。そこで、次に、内蔵されていた銭貨の種別と、その初鋳年、特に中国銭の数量的内包量の検討から、蓄銭の下限時期を考えてみよう。これはあくまで、この容器に蓄銭された最終時期の極く近時点という年代である。

(2) 埋蔵銭貨の分類

半田警察署が発見時において、詳細に数量を確認しており、木箱それぞれに6,720枚の$\frac{1}{2}$ずつを納め、他に破損銭80枚を数えている。愛知県陶磁資料館において銹落し作業を実施し、数量の確認をした結果、破損銭は同一個体と思われるものと接合可能品が5点あり、合計75枚となった。6,720枚の木箱2箱は、2枚が銹着して1枚の如く見えるものが10数枚存在し、最終的には、6,730枚となった。従って、総合計6,805枚が、この常滑甕の中に存在していたこととなった。

銭貨の種別と数量は、表1のとおりであるが、銭名別で56種があり、書体別に分類すれば、29種増え、85種の多きに達する。56種のうち、最も多い銭貨は、皇宋通宝で、910枚、全体の13.37％、次に元豊通宝の820枚で12.05％を占めていて、北宋銭の渡来銭使用が圧倒的に多かったことを示している。

比率を比較するために表1の最後の2行に記入した数は、函館市志海苔(しのり)町の道路工事で、昭和43年7月に発見された、越前窯産の室町前期甕2ケと珠洲系甕1ケの計3ケの甕中の、総合計374,436枚(散佚分を含めて50万枚と推定されている)の銭貨の種別数量と比率である。日本最大の量の出土をみたことで著名な函館志海苔古銭は、94種の銭貨があり、最も新しいもの(注6)は、洪武通宝(明・初鋳年1368)12枚である。新しい年代のものは、篠島古銭より遅く、篠島が至大通宝(元・初鋳年1310)で終るのに対し、志海苔古銭は、至大通宝110枚、至正通宝(元・初鋳年1341)3枚、大中通宝(明・初鋳年1361年)1枚と、14世紀中葉から後半のものが少量ながら、明瞭に含まれている。但し永楽通宝(明・初鋳年1408)は含まれていない。

表1. 篠島出土銭貨種別表　(総重量 24,572 g)

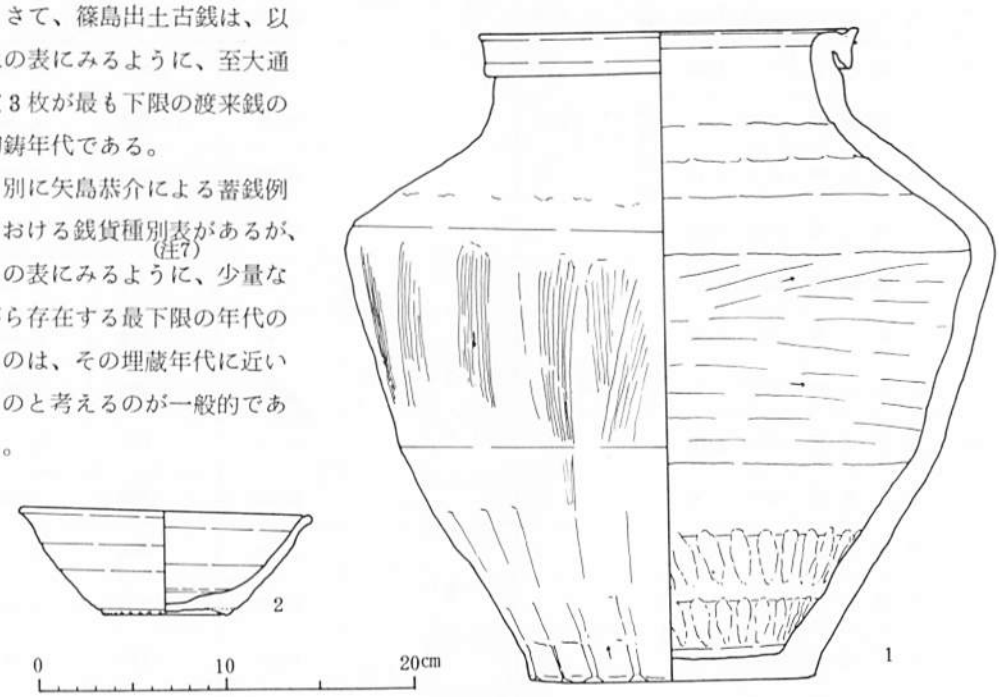
No. 古銭No.	古銭名称	初鋳年	数量		備考	全量に占める %	函館(1368以降)志海苔古銭	同左 %
1	五銖	前漢前115		1	A.D 40年後漢・光武建武元年もの	0.01	39	0.01
2	開元通寶	唐 621		575	唐、会昌5年(845)のものあり	8.45	30,816	8.23
3	乾元重寶	唐 758		24		0.35	1,422	0.38
4	通正元寶	前蜀 915		1		0.01	8	0.002
5	大唐通寶	南唐 944		1		0.01	2	0.0005
6	周通元寶	後周 955		1		0.01	87	0.02
7	唐國通寶	南唐 959		9		0.13	393	0.10
8	宋元通寶	北宋 960		19		0.28	1,288	0.34
9	太平通寶	北宋 976		65		0.96	3,512	0.94
10	淳化元寶	北宋 990	a 17 b 19 c 19	55	aは真, bは行 cは草書体	0.81	3,258	0.87
11	至道元寶	北宋 995	a 35 b 34 c 28	97	〃	1.43	5,851	1.56
12	咸平元寶	北宋 998		97		1.43	6,400	1.71
13	景德元寶	北宋 1004		135		1.98	8,139	2.17
14	祥符元寶	北宋 1008		150		2.20	9,322	2.49
15	祥符通寶	北宋 1008	a 10 b 106	116	aは大文字 bは小文字	1.70	5,384	1.44
16	天禧通寶	北宋 1017		156		2.29	7,943	2.12
17	天聖元寶	北宋 1023	真 198 篆 160	358		5.26	17,924	4.79
18	明道元寶	北宋 1032	真 18 篆 21	39		0.57	1,813	0.48
19	景祐元・寶	北宋 1034	真 51 篆 32	83		1.22	5,384	1.44
20	皇宋通寶	北宋 1039	真 480 篆 430	910		13.37	47,031	12.56

番号 古銭番号	古銭名称	初鋳年	数量		備考	全量に占める %	函館(1868以降) 志海苔古銭	同左 %
21	至和元寶	北宋 1054	真 45 篆 19	64		0.94	4,452	1.19
22	至和通寶	北宋 1054	真 11 篆 9	20		0.29	1,416	0.38
23	嘉祐元寶	北宋 1056	真 54 篆 36	90		1.32	4,478	1.20
24	嘉祐通寶	北宋 1056	真 96 篆 65	161		2.37	8,729	2.33
25	治平元寶	北宋 1064	真 66 篆$_1$ 8 篆$_2$ 43	117	篆$_1$…b 篆$_2$…c	1.72	7,002	1.87
26	治平通寶	北宋 1064	真 8 篆$_1$ 4 篆$_2$ 3 篆$_3$ 3	18	篆$_1$…b 篆$_2$…c 篆$_3$…d	0.26	1,154	0.31
27	熙寧元寶	北宋 1068	真 334 篆$_1$141 篆$_2$ 96 篆$_3$ 48	619	篆$_1$…b 篆$_2$…c 篆$_3$…d	9.1	34,897	9.32
28	元豊通寶	北宋 1078	真 462 篆 358	820	真は大半行書体	12.05	43,009	11.49
29	元祐通寶	北宋 1086	真 296 篆 312	608	真は大半行書体	8.93	33,904	9.05
30	紹聖元寶	北宋 1094	真 153 篆 132	285	真は大半行書体	4.19	14,917	3.98
31	元符通寶	北宋 1098	真 42 篆 40	82	真は大半行書体	1.21	5,721	1.53
32	聖宋元寶	北宋 1101	真 133 篆 122	255	真は大半行書体	3.75	14,333	3.83
33	大観通寶	北宋 1107		97		1.43	4,230	1.13
34	政和通寶	北宋 1111	真 145 篆 122	267		3.92	15,206	4.06
35	宣和通寶	北宋 1119	真 17 篆 9	26		0.38	1,412	0.38
36	紹興元寶	南宋 1131		1		0.01	149	0.04
37	紹興通寶	南宋 1131		1		0.01	16	0.004
38	正隆元寶	金 1158		2		0.03	479	0.13
39	淳熙元寶	南宋 1174	真 36 篆 1	37	真書体の背に番号あり四～十六	0.54	2,366	0.63
40	紹熙元寶	南宋 1190		13	背に番号 元～十三	0.19	774	0.21
41	慶元通寶	南宋 1195		16	背に番号 元～六	0.24	938	0.25
42	嘉泰通寶	南宋 1201		7	背に番号 元～三	0.10	549	0.15
43	開禧通寶	南宋 1205		7	背に番号 元～三	0.10	356	0.10
44	嘉定通寶	南宋 1208		35	背に番号 元～十四	0.51	1,735	0.46
45	大宋元寶	南宋 1225		1	背に番号 三	0.01	84	0.02
46	紹定通寶	南宋 1228		6	背に番号 二～六	0.09	614	0.16

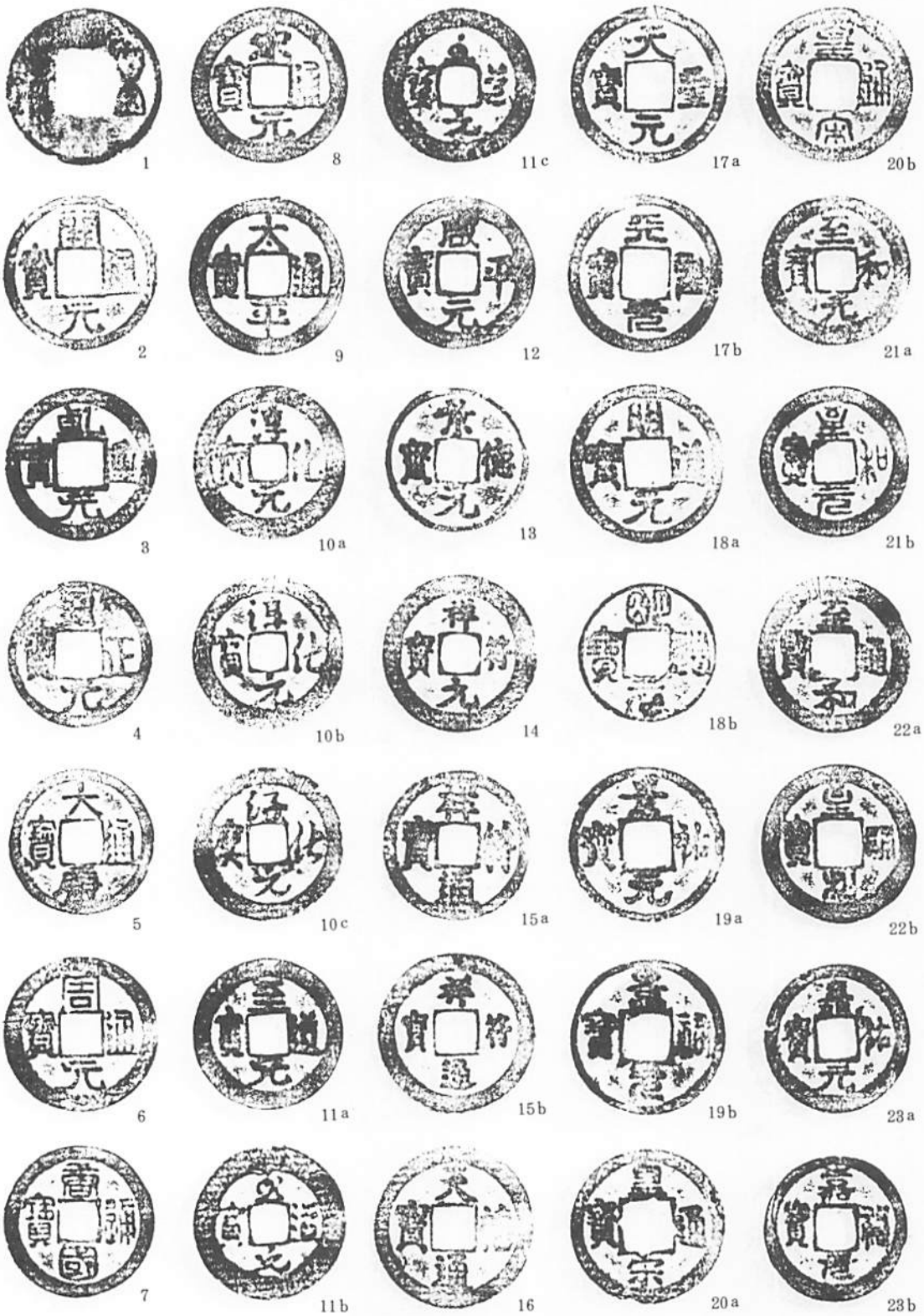
古銭名	古銭名称	初鋳年	数量	備考	全量に占める %	函館(1368以降) 志海苔古銭	同左 %
47	嘉熙通寶	南宋 1237	2	背に番号 三	0.03	161	0.04
48	淳祐元寶	南宋 1241	7	背に番号 元～八	0.10	530	0.14
49	皇宋元寶	南宋 1253	7	背に番号 元～六	0.10	285	0.10
50	開慶通寶	南宋 1259	3	背に番号 元	0.04	20	0.005
51	景定元寶	南宋 1260	7	背に番号 元～五	0.10	475	0.13
52	咸淳元寶	南宋 1265	12	背に番号 二～八	0.18	583	0.16
53	至大通寶	元 1310	3		0.04	110	0.03
54	元化通寶 (私鋳銭)	?	1	シマ銭	0.01		
55	淳化元寶 (私鋳銭)	?	2	シマ銭	0.03		
56	無文	?	4	無文，広穿	0.06		
57	銭名不詳	?	210		3.09	12,901	3.45
						その他 435	0.11
	合計		6,805		100	374,436	100

さて、篠島出土古銭は、以上の表にみるように、至大通宝3枚が最も下限の渡来銭の初鋳年代である。

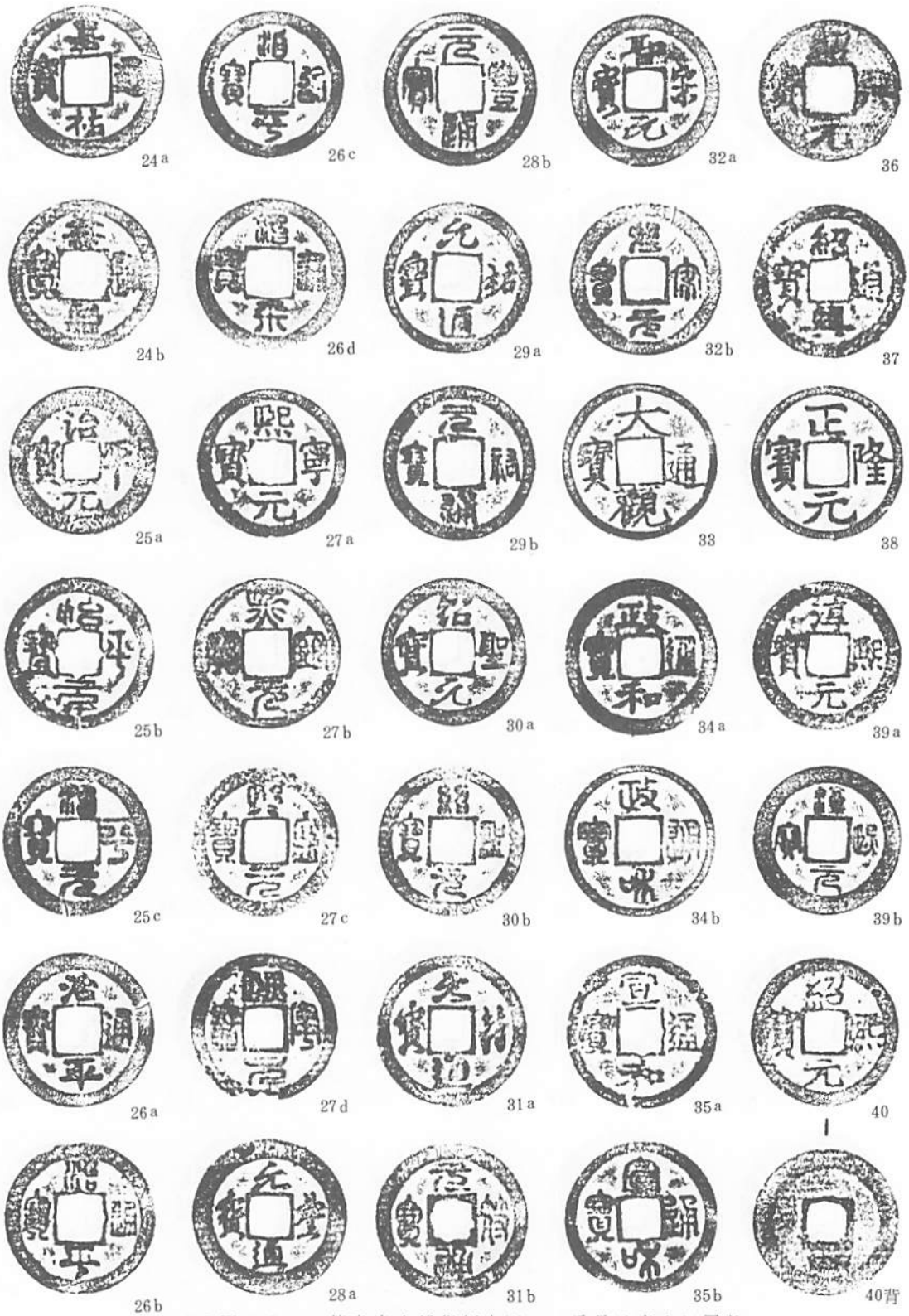
別に矢島恭介による蓄銭例における銭貨種別表(注7)があるが、その表にみるように、少量ながら存在する最下限の年代のものは、その埋蔵年代に近いものと考えるのが一般的である。



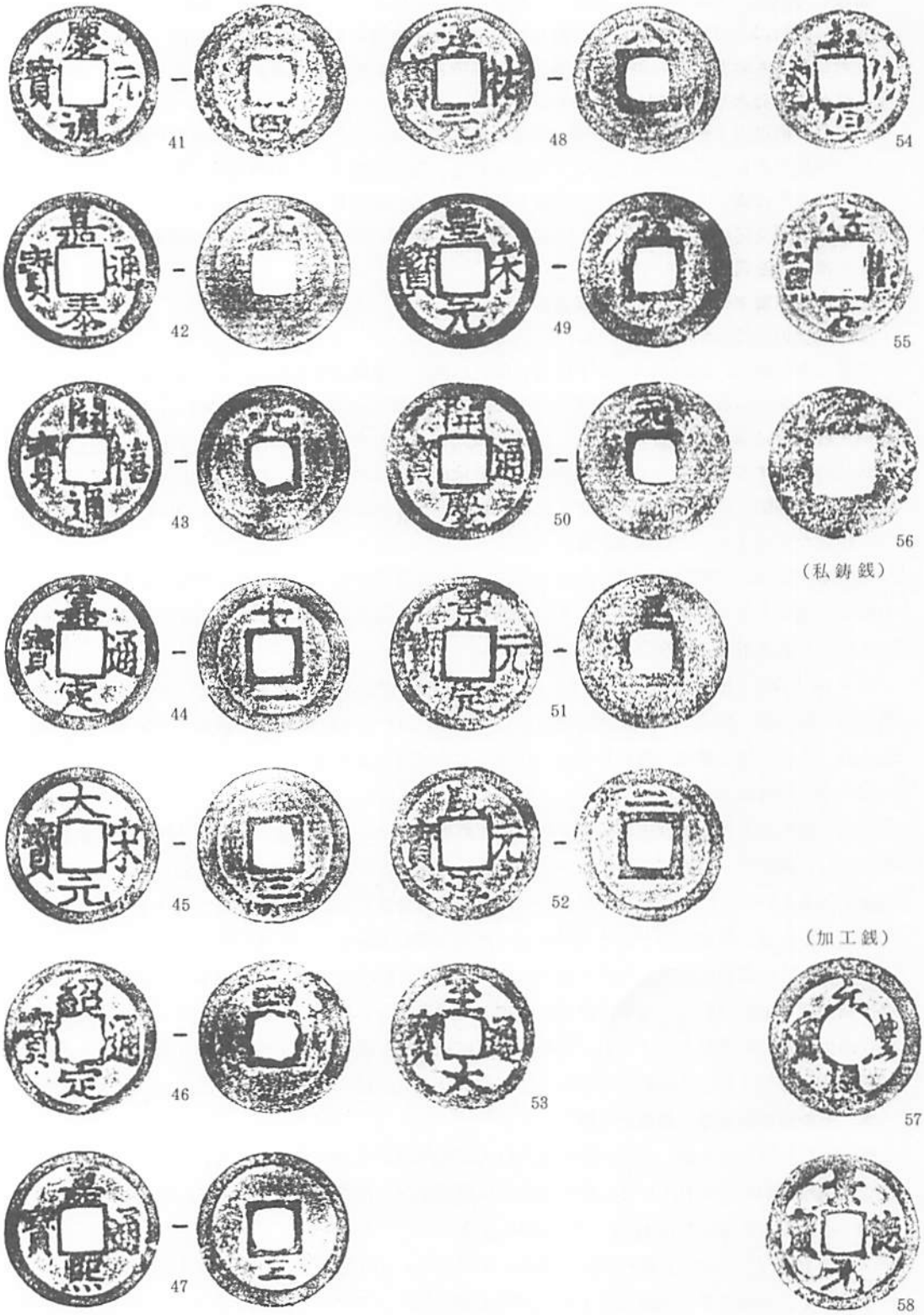
第1図　篠島出土　常滑甕・山茶椀



第２図の１　篠島出土銭貨拓本(1)　番号は表１に同じ



第２図の２　篠島出土銭貨拓本(2)　番号は表１に同じ



第2図の3　篠島出土銭貨拓本(3)

番号は表1に同じ(41～52の右は背面)。但し57, 58は鋳造後の加工銭。(20a, 25b, 26b, 31b, 35a, 46も穿内加工銭である。)

蓄銭の方法は、あらかじめ、埋められた甕へ銭貨が貯えられて徐々に納められていくという説もあるが、銭貨の発見状況を詳細に観察した結果の報告は皆無で、その方法を証明した例もない。いずれにしても容器製造時から蓄銭用として埋納されるまでに時間差があったとしても、容器の堅牢性から充分ありうることではある。

しかし、篠島出土例では、常滑甕の器壁の摩耗度が少なく、これが生産された比較的早い時期に銭貨蓄積用として利用されたものと考えられる。先に問題にした山茶椀は、内面の摩耗からみて、製作年代は甕より古く、若干の伝世を経たのち蓋の役割をもって埋納されたのであろう。なお、この蓄銭甕埋納者は、おそらく14世紀初め頃、伊勢湾口における漁業と航路権を握ろうとした土着富豪層を考えてよいであろう。

2. 岡崎市舞木町社口田出土の蓄銭例

(1) 発見の経緯と常滑甕

最近の発見例で、昭和59年12月14日、県営ほ場整備事業山綱地区舞木工区地域内で工事中に発見され、岡崎市教育委員会が調査、収集した。発見場所は西三河の中心岡崎と、東三河の中枢、豊川・豊橋を結ぶ東海道筋にあたり、丘陵が両側から迫り北側山頂には中世の代表的な山城・山中城址の存在する地区である。丘陵末端部と台地形の接点からやゝ台地形寄りの方で発見されたといい、甕の胴上位から口縁にかけては機械によって$\frac{1}{3}$強が削平されたので、埋納形態としては、やゝ傾いた形であったと想像される。

常滑産の甕は、口縁部の縁帯が巾広くなりつつある段階を示し、いわゆるN字状口縁が頸部との間に空間をもたなくなってきている。頸部も胴部との境をなくし、甕本来の用途をもった器形へと移行する様相をよく物語る資料である。

高さ53.7㎝、口径37.2㎝、胴径55.0㎝の大形品で、焼成状況は下半部がやゝあまく、上半部外面は、暗灰色、内面は全体に赤褐色を呈している。5～6㎝の粘土帯11段ほどの積み上げが認められ、内面全体に銭貨が銹着していた状況を示す痕跡がよく残っている。

(2) 出土銭貨について

現在、岡崎市教育委員会市史編纂室において整理が進められている。総数25,000枚の北宋銭を中心とした銭貨で、整理を実施している編纂委員斉藤嘉彦氏によれば、最も新しい銭貨は、洪武通寶であるといい、以後の銭貨、なかでも永楽通寶は含まれていないとのことである。整理途中の成果によれば、埋納容器である常滑甕は、洪武通寶の初鋳年1368年以降に使用されたと考えられる。前述の篠島出土の常滑甕との比較や、高坂1号窯出土大甕、山梨県東山梨郡大和村棲雲寺の開山僧（没年1352年）蔵骨器使用の大甕の口縁変化との比較(注4)において、おそらく14世紀末葉から15世紀初めの製品と考えられ(注8)、常滑製品の編年表第Ⅳ期に対比すべき資料と考えられ(注9)、器形の編年的位置および出土銭貨最下限からくる埋納年代ともほゞ付合するということがいえよう。

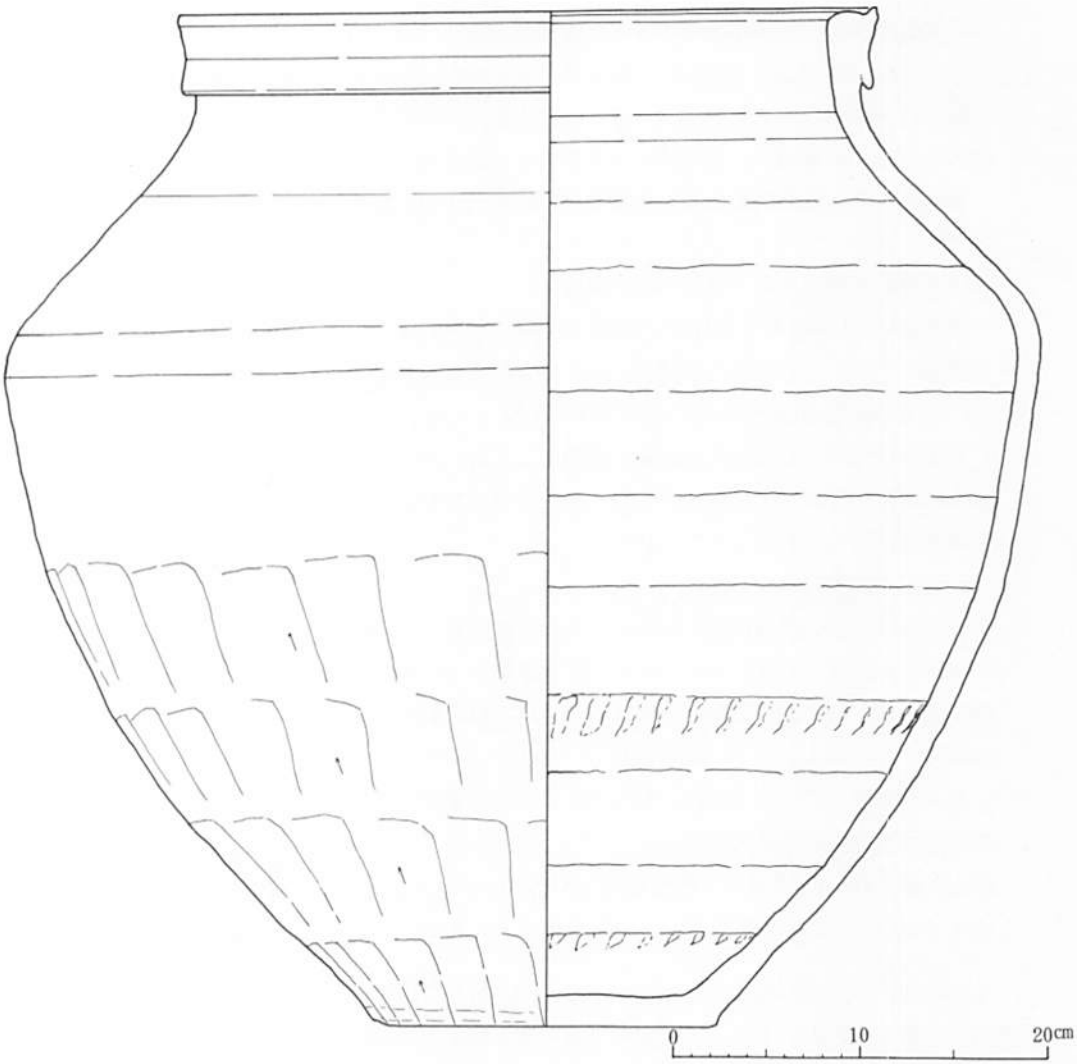
3. その他の容器伴出銭貨出土例

戦前の報告例であるが、「愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告」によれば、容器伴出例としては、6例ほどがあげられている(注10)。他に皇朝十二銭埋納例を加えて7例を以下に列記する。

(1) 小牧町北外山字神田1566－1　（現小牧市）

昭和10年2月発見、古瀬戸釉の小壷（？）の中に、和同開珎3、神功神宝4、富寿神宝2、半両銭1、五銖銭1、大徳通宝1（1297年初鋳）が入っていたという。

(2) 佐織村諸桑字中江128－1　（現海部郡佐織町）



第３図　　岡崎市舞木町出土　　常滑甕

明治28年5月発見、２個の常滑甕（蓋に瀬戸灰釉三足盤）と１個の灰釉三耳壷（蓋に灰釉盤）の中に銭貨約319㎏が入っていた（筆者推定９万枚）。

19㎏（推定5,000枚強）を残し、他は鋳つぶしたというが、残存銭貨では篠島例と同様の至大通宝（1308年初鋳）までのものであったという。

(3)　宝飯郡小坂井町大字篠東字郷中88・89

大正15年8月医王寺境内にて、鼠色をした甕（蓋に瓦を使用；渥美窯産の甕か）の中に67.5㎏の銭貨（筆者推定19,000枚）が発見された。選んだ200枚の銭貨の内訳は、咸淳元宝（初鋳年1265年）が最後という。甕は肩にヘラ書きの窯印らしきものがあり、渥美窯の特徴的な胴張りをもつもので、13世紀後半代に位置づけられよう。しかし、銭貨はわずか200枚という少量の検討であるから、埋蔵年代の証明とはならない。13世紀後半に埋納された可能性があるというところであろう。

(4)　海部郡神守村百町字光善寺５　（現津島市）

昭和13年6月地表下90㎝にて発見。瀬戸鉄釉甕（15世紀代の鉄釉広口壺か）に銭貨60㎏（推定16,500枚）を入れ、擂鉢を蓋として出土したという。抜取り200枚の内訳は、宋銭が主体で、明・洪武通宝１、永楽通宝３（初鋳年1408年）であった。

壺の製作年と蓄銭容器として使用した年代に若干の差があるが半世紀とは違わないものであろう。

(5)　丹羽郡楽田村本町124　（現犬山市）

昭和13年３月地表下30㎝から油壺（素焼？）を発見、中に元禄～嘉永までの金銀貨203枚が埋納されていた。中世の蓄銭甕とちがい、明らかに財産隠しであろう。

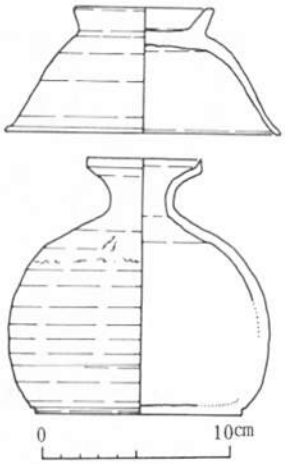
(6)　東春日井郡志段味村大字吉根字松洞3417　（現、名古屋市守山区）

明治39年2月、古墳時代須恵器の長頸壺と思われる容器の、頸部以上を欠くものの中に慶長小判金等金貨100枚が発見されたもので発見地が龍泉寺庫裡礎石下ということから慶長年間に復興資金として埋蔵されたという。

(7)　稲沢市国府宮町宗形地区

昭和52年8月、国府跡推定地(注11)調査によって乾元大宝（初鋳年958年）16枚とムクロジの実および炭化米の入った素焼の盤口形小瓶と同様素焼の椀が発見された（共に白色陶質土器と呼称したものである）(注12)。礎石建物の一部とみられる小ピットに２個が近接し、上下に出土しており、建物の鎮壇具として埋納されたものと考えられる。

以上、過去の、容器を伴って発見された例を列記したが、これらには、時代とともにその埋納思想の相違があることが知られる。



第４図　稲沢市国府跡（宗形地区）出土白色陶質土器（瓶・椀）

すなわち、平安期の例としてあげうる３－(7)の稲沢市出土の盤口形小瓶（白色陶質土器）と皇朝十二銭最後の乾元大宝例は、新鋳銭の諸社・諸寺への配布（日本紀略　後篇四　村上天皇　天徳三年　四月の条）の結果、鎮壇具として使用された例といえるものである。３－(1)例もそうした名残りであろう。

次は、本稿のきっかけとなった備蓄銭（備荒貯蓄）用に埋納されたもので最も多く発見例がある。

１、２の篠島・岡崎例や、３－(2)、(3)、(4)がそれらにあたる。全国各地で発見されているが、最高推定50万枚の３つの大甕に入っていた函館市志海苔例は14世紀末までの銭貨出土例であり、新潟県湯沢町石白（伝・泉福寺遺跡）例は27万枚が木製箱(注13)に入って検出されているが埋納年代が15世紀後半から16世紀頃と推定されているもので(注14)、14～５世紀に多いことを示している。

こうした備蓄銭の内容分析は、これまで、統計的に分類され、埋納年代の違いを出土銭貨の鋳造年の最も新しいものにその根拠を求め、主として渡来銭の銭種別の流通関係、あるいは中国での鋳造量に言及しているほか(注15)、流通現象の特徴を３期に分け概観されてきた。

一方、考古学的調査の資料の増大に伴い、特に備蓄銭を含めて、意図的な埋蔵銭貨をその性格別に分類し、埋納銭貨の時代的意義の変遷、ひいては経済流通関係（容器も含めて）(注16)、交通路などとの係わりなどへ検討の視点を進めようという動きもみられるようになった。

篠島・岡崎出土例に関していえば、埋納年代と、常滑甕の製作年代は、それぞれほゞ同一時代と考えられ、甕に一時的な日常容器としての利用があったとしても、短期間のことで、やがてすぐに備蓄銭用として、埋納されたものと考えられる。但し、山茶椀使用年代は内面の摩耗度からも若干の使用時間のあったことを想定せざるを得ない。また、両者は、時間的な差がほゞ60年以上あったと考えられ、備蓄銭における時期的な特徴を銭貨からみて2期に分けられるとする見解(注19)と合致する。ひとつは南宋代咸淳元宝、元代の至正通宝が備蓄銭の最下限にあたり、埋蔵時期が鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての13世紀後半から14世紀中頃までと考えられる遺跡である。篠島例のほか3－(3)の篠束例がこれに該当する可能性がある。3－(2)の諸桑例については、検索銭貨の最下限が至大通宝ということであるが、出土量の多さ、出土容器からみて、14世紀後半から15世紀へかかる可能性が強い。

もうひとつは、明の宣徳通宝（1433年）ないし、李氏朝鮮の朝鮮通宝（1423年）あたりが最終銭貨となる場合で、15世紀前半から中頃を中心に埋納されたと思われる遺跡である。岡崎例や、3－(4)にあげた神守例などがこれにあたる。この期のものは、概して容器も大きく、従って埋納銭貨も数万から10万枚という多量な備蓄銭を出土した例も各地にみられる。もちろん14世紀代と考えられるものの中にも2万枚以上の出土例(注20)も数多くあり、普遍的ではないが、一つの傾向としてとらえれよう。

次に15世紀代(注21)にも若干みられるものであるが、1,000枚前後の埋納量をもつ例が江戸初期以降各地にみられる。貯蓄目的としてはやゝ少量であるが、埋納者の階層等の差がその背景には考えられよう。また、量的に少量ながら、価値の高い金銀貨を埋納した例もある。3－(5)や、3－(6)の楽田・吉根(きっこう)例などがそれであるが、吉根例は慶長頃の龍泉寺復興資金という限定目的にそった埋納と考えられるもので備蓄銭の内容に変化が起ってきていることを示している。

すなわち、城館跡周辺とか、商業経済と関連性の強い場所、さらには、中世大規模寺院の利銭的活動といった14～15世紀の備蓄銭出土遺跡の内容に比べ、金銀貨への切り換えや蓄銭量の少量化、従って容器の小形化といった現象は、単一目的での銭貨埋納（財産埋蔵あるいは奉賽目的）が拡がっていくことを示しているのであろう。

こうした形態の埋納銭貨の発見例が最近、県下にみられたのので以下に紹介する。

4. 鳳来町下吉田出土の蓄銭例

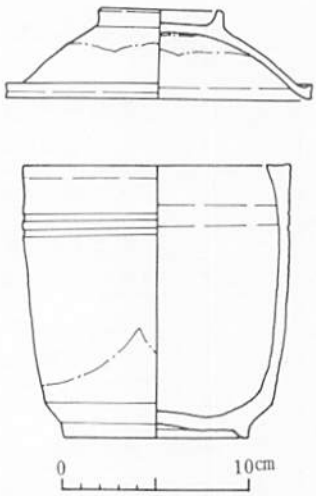
昭和61年3月、南設楽郡鳳来町下吉田字小阿寺86番の山林で、地主豊田善一氏が杉の苗木を補植中に、瀬戸・美濃製陶器を工具の先にあて、中に寛永通宝約1,000枚を発見したものである。

発見地は、鳳来町本長篠と静岡県引佐町を結ぶ街道から2キロほど小谷を入ったところで、特に豪農・豪商の存在する住居地とは考えられない地域である。

出土品は以下の通りである。

(1) 銭貨埋納容器

銭貨1,000枚強が入っていた容器は、瀬戸・美濃産と考えられる鉄釉半筒形容器で、俗に半胴甕と呼称されているもののや(注22)



第5図　鳳来町出土　銭貨埋納施釉陶器

や小形なものである。口径 14.3㎝、高さ 14.2～14.3㎝、底径 9.9㎝ で、付高台と思われる輪高台がある。胎土はやゝ黄味をおびた細かい黒斑のみられるもので、割れ口断面はやゝ白っぽい。柿色の釉が内面全部と外面$\frac{3}{4}$をおおう。浸し掛けで釉掛けされている。口縁は内面にふくらむ形態で、外表面には、口縁下 2.5㎝以下に巾 1㎝ほどで二重沈線がめぐっている。

この容器には、蓋があって、灰釉皿が転用されている。半胴甕に比べやゝ堅緻な灰色がかった胎土で、白っぽい灰釉が口縁から 4 ㎝巾ほどの範囲に漬け掛けされ、内面見込み中央に、同じ灰釉を直径 4 ㎝ほどにつけている。重ね焼きのためか、見込みに輪状の無釉部分が作られているわけである。直径16.2㎝、高さ4.5～4.8㎝、底径6.7㎝の高台をもつ皿である。この皿も瀬戸・美濃産と考えられるが、生産窯を特定できるものではない。通常18～19世紀の製品とされる日常雑器類である。これらの容器は、以下の銭貨の検討から、18世紀後半の生産品とみることが可能である。

(2) 埋納銭貨の分類

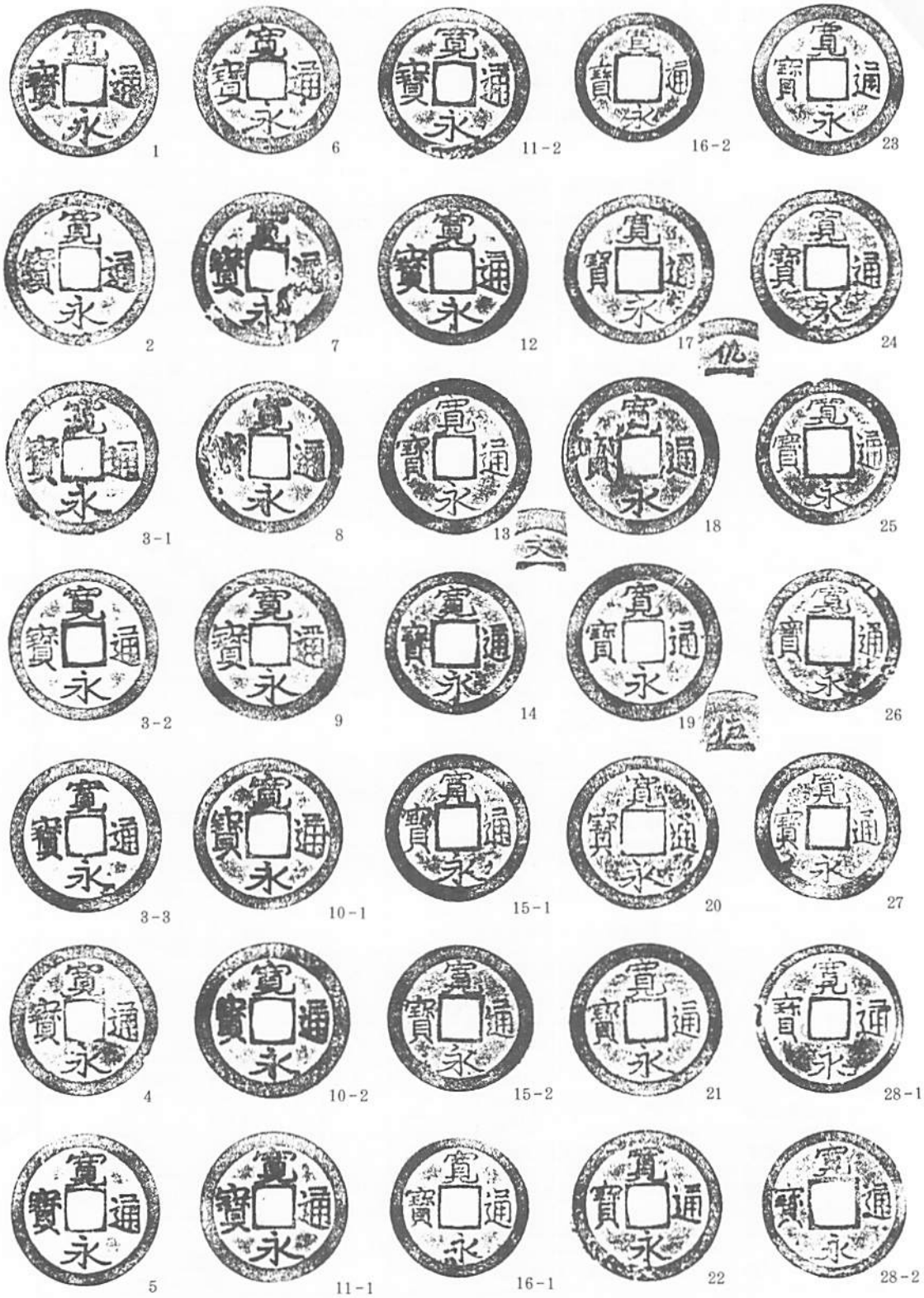
この鉄釉半胴甕から出土した銭貨は、表 2 の如く寛永通宝 968枚、中国銭 5 枚、寛永通宝と思われるが銭名不詳のもの49枚の合計1,022 枚である。

寛永通宝の内訳は、古寛永が 142枚、他は新寛永で、鋳造年の最も新しいものは、明和 5 年（1768年）の江戸・亀戸銭で、合計15枚が出土している。埋納された時期は、その後鋳造された明和 6 年（1769年）、安永 3 年（1774年）銭が含まれていないことから、明和 5 年直後のころと推定される。

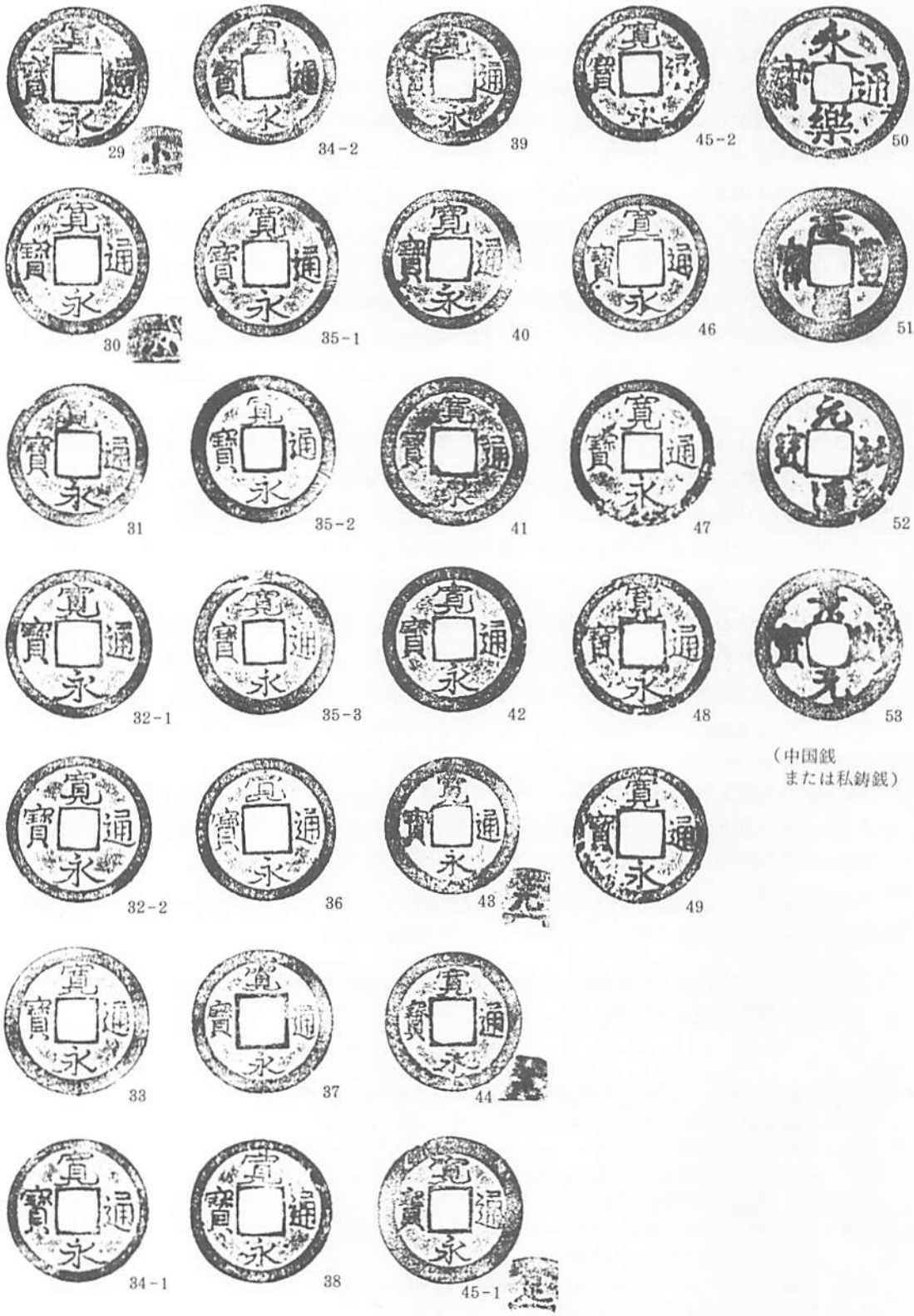
表 2. 鳳来町下吉田字小阿寺出土銭貨分類表　　（総重量　2,985 g）

No. 古銭No.	古銭名称	古銭（寛永）区別呼称	鋳造年	西暦	数量	備考
1	寛永通寶（古）	近江坂本銭	寛永13年	1636	1	銅
2	〃　〃	水戸銭（長永）	〃 14年	1637	5	〃
3	〃　〃	仙台銭（大永）（跛宝）（刓輪）	〃	〃	3 1 14 } 18	〃
4	〃　〃	〃（五大点）	〃	〃	1	〃
5	〃　〃	松本銭（太細）	〃	〃	10	〃
6	〃　〃	吉田銭（大頭通）	〃	〃	2	〃
7	〃　〃	岡山銭（俯永）	〃	〃	2	〃
8	〃　〃	〃（良想?）	〃	〃	3	〃
9	〃　〃	駿河・井之宮銭	〃 16年	1639	6	〃
10	〃　〃	京都・建仁寺銭（大永）（小永）	承応 2 年	1653	7 5 } 12	〃
11	〃　〃	駿河・沓谷銭（大通）（細通）	明暦 2 年	1656	35 23 } 58	〃
12	〃　〃	江戸・鳥越銭	〃	〃	24	〃
13	〃　（新）	江戸　亀戸銭（背文）	寛文 8 年	1668	30	〃　背に文
14	〃　〃	〃　〃（跳永）	元禄10年	1697	44	〃
15	〃　〃	京都・七條銭（草点永）	〃 13年	1700	13	〃　永に異字あり（15—2）
16	〃　〃	江戸・四ツ宝銭（広永）（小字）	宝永 5 年	1708	14 10 } 24	〃
17	〃　〃	佐渡・相川銭（背佐）	正徳 4 年	1714	1	〃　背に佐
18	〃　〃	江戸・浅草銭（大字）	〃	〃	7	〃
19	〃　〃	佐渡・相川銭（背広佐）	享保 2 年	1717	5	〃　背に佐

右古銭右	古銭名称	古銭（寛永）区別呼称	鋳造年	西暦	数量	備考
20	寛永通寶（新）	京都・七條銭（進永）	享保11年	1726	84	銅
21	〃　〃	江戸・十万坪銭（進点永）	〃	1717	6	〃
22	〃　〃	仙台・石ノ巻銭（異通無背）	〃 13年	1728	7	〃
23	〃　〃	〃　？（異書低寛）	〃	〃（？）	92	〃　一部鉄
24	〃　〃	摂津・難波銭（中縁）	〃	〃	8	〃
25	〃　〃	江戸・深川銭（輪十鋳込）	元文元年	1736	3	〃
26	〃　〃	〃　（輪十後打）	〃	〃	2	〃
27	〃　〃	山城・鳥羽銭（進永）	〃	〃	78	〃
28	〃　〃	紀伊・中島銭（大字）（小字）	〃 2年	1737	3 / 1 } 4	〃
29	〃　〃	江戸・小梅銭（背小）	〃	〃	1	〃　背に小
30	〃　〃	〃　（小字背小）	〃	〃	9	〃　〃
31	〃　〃	〃　（仰寛）	〃	〃	2	〃
32	〃　〃	江戸・亀戸銭（広穿）（狭穿）	〃	〃	20 / 7 } 27	〃
33	〃　〃	出羽・秋田銭（跳永大字）	〃 3年	1738	30	〃
34	〃　〃	不知銭（長尾永中字）（〃　短通）	〃	〃	8 / 67 } 75	〃　産地不明 一部鉄
35	〃　〃	江戸・平野新田銭（中字）（小字）	〃 4年	1739	18 / 47 } 65	銅　永に異字あり （35－3）
36	〃　〃	〃　〃（中字跳寛）	〃	〃	34	〃
37	〃　〃	相模・吉田島銭（縮字）	〃	〃	12	〃　一部鉄
38	〃　〃	江戸・柳島銭　（小字）	〃	〃	7	〃
39	〃　〃	江戸・十万坪銭（小字）	〃	〃	4	〃
40	〃　〃	不知銭　（含二水永）	〃 頃	〃頃	1	〃
41	〃　〃	摂津・加島銭　（広縁）	元文頃	1740頃	3	〃
42	〃　〃	紀伊・中島銭（虎ノ尾寛）	〃	〃	29	〃
43	〃　〃	大阪・高津銭（細字背元）	寛保元年	1741	49	〃　背に元
44	〃　〃	〃　（長宝背元）	〃	〃	20	〃　背に元
45	〃　〃	下野・足尾銭（大字背足）	〃	〃	28	〃　背に足 永に異字あり（45－2）
46	〃　〃	長崎・一ノ瀬銭（小目寛）	〃	〃	7	〃
47	〃　〃	江戸・亀戸銭　（大様）	明和5年	1768	1	〃
48	〃　〃	〃　（中様）	〃	〃	1	〃
49	〃　〃	〃　（小様）	〃	〃	13	〃　一部鉄
50	永楽通宝	中国での初鋳年 明 永楽6年（1408）	中　国		1	〃
51	元豊通宝	〃 北宋元豊元年（1078）	〃		2	〃
52	元祐通宝	〃　〃 元祐元年（1086）	室町末（15～16世紀）改造鐚（？）		1	〃
53	景徳元宝	〃　〃 景徳元年（1004）	中　国		1	
54	銭名不詳	すべて寛永通宝と思われる			49	分類不可 銅・一部鉄
	合　計				1,022点	



第 6 図の 1　　鳳来町出土銭貨拓本(1)　　番号は表 2 に同じ
13, 17, 19 の右下は背面文字



（中国銭
または私鋳銭）

第６図の２　　鳳来町出土銭貨拓本(2)　　番号は表２に同じ
29, 30, 43, 44, 45-1 の右下は背面文字

他に中国銭が5枚出土しているが、北宋の景徳・元豊・元祐通宝と、明の永楽通宝である。元祐通宝が私鋳銭の可能性をもつほかはすべて中国銭で、13～15世紀に渡来してから18世紀後半まで、通貨としては、江戸時代初期に、邦貨の流通によって陰を潜めたはずのこれらの銭貨が、極めて微量ながら、通貨として規定された幕藩下の寛永通宝一文銭の中に隠れて息永く流通していたことを示している例といえよう。(注23)

銭貨総数1,022枚は、当時の流通貨幣の単位としては約一貫文にあたり、金0.257両という価値であり、明和3～4年頃の大坂米相場に対応させてみると、わずかに0.21石（広島米）の米価である。蓄銭量としては少額といわざるを得ない。(注24) 備蓄銭、副葬銭といった目的を除けば、銭貨埋納として考えられる行為は寺社・建物への奉賽ないし地鎮目的、墓地あるいは経塚等への追供養目的があるが、本遺跡については、建物、墓地等の遺構とのつながりは、現在のところ認められない。従って少額ながら江戸時代後期の農村における財産貯蓄の一形態であろうと推定される。

結　び

以上、容器を伴う銭貨の埋納例を眺めてきたが、このほか銭貨の埋納には、備蓄銭として木箱などに納められたかとおもわれるものの報告例が県内にも何か所か知られている。しかし、これらは、大部分、中世の渡来銭を中心としたもので、内容的には、篠島例や岡崎例(注25)と大差ない。したがって、こうした備蓄銭も含めて銭貨埋納例の変遷を眺めてみると、貨幣史から史的変遷を3期区分して概観される論(注26)と同様、①奈良平安期の皇朝十二銭を中心として、蔵骨器の中へ副葬される例、寺院等の地鎮・奉賽として埋納される例が多い時期、②平安末期以後の中国渡来銭を中心として、経塚等への小量の奉賽銭を含みながら、13世紀末から14世紀前半期および14世紀末から15世紀前半期の2時期にピークを持つ万を超す量の備蓄銭として埋納された時期、③桃山から江戸初期以降の備蓄銭内容に邦貨が主体をなし、金銀貨が中心となる時期の3期区分が認められよう。この③期には、財産埋蔵あるいは奉賽目的といった限定された目的での蓄銭が、多くなるものとみられる。

このように日本各地の銭貨埋納は、愛知県下でみられる内容とほゞ同一の変遷をたどっており、中世の大量な渡来銭の埋納を除けば奉賽、地鎮、副葬銭といった個別目的の埋納は、貨泉の内容に時代的差はあれ、全時代を通じておこなわれていたといえよう。

本稿にあたって、銭貨の整理、資料の提供その他にご協力いただいた下記の方々には、ご多忙にもかかわらず、大変ご無理をおかけした。記して感謝の意を表する次第である。

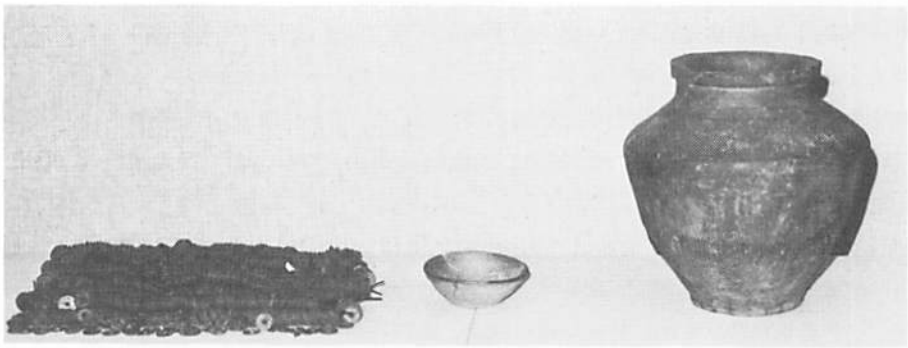
荒井信貴・岡本和久・斉藤嘉彦・林治雄・三輪昭三、岡崎市教育委員会・鳳来町教育委員会・南知多町教育委員会（敬称略）。

注1.　『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第16, 17　愛知県 1938, 1939
注2.　『高坂古窯址群』常滑市文化財調査報告第10集　常滑市教育委員会 1981
注3.　杉崎章「常滑古窯製品の編年」『高坂古窯址群』所収，1981. 中野晴久「知多古窯址群における山茶
注　碗の研究」『常滑市民俗資料館研究紀要1』1983
注4.　注2『高坂古窯址群』に同じ。
注5.　赤羽一郎「常滑」『常滑・渥美』日本陶磁全集8，中央公論社 1977
　　および同『常滑』技報堂出版 1983
注6.　『函館志海苔古銭』市立函館博物館・函館市教育委員会 1973
注7.　矢島恭介「貨幣」『日本考古学講座』7.　河出書房 1956
注8.　「山梨の中世陶磁」山梨県立考古博物館　第3回特別展図録 1985.（展示目録№75. 高さ 67.5cm）

注９　注５に同じ。
注10　注１に同じ、第16. 第17をまとめた。
注11　『尾張国府跡発掘調査報告書(1)』稲沢市教育委員会 1979
注12　同上、椀は、瓶の蓋となっていたと考えられる。
注13　注６に同じ。
注14　坂詰秀一「出土渡来銭の諸問題」『考古学ジャーナル』187　1981
注15　日比野丈夫「古銭」『新版考古学講座』9.　特論(中)　雄山閣 1971
注16　注７および矢島恭介「物資の交易と貨幣」『日本の考古学』7.　歴史時代下　河出書房 1967
注17　是光吉基「各地域出土の渡来銭―九州・中国・近畿地方―」『考古学ジャーナル』187.　1981
注18　「特集　出土渡来銭の再検討」『考古学ジャーナル』187.　1981
注19　注17に同じ。
注20　注１文献；３―(3)　小坂井・篠東例など。
注21　注15および注７各地出土銭貨例の量的に少ないものは14世紀代に多い。
注22　19世紀の瀬戸地区生産陶磁器の模写図などにこの名がある。
注23　注16に同じ。
注24　『角川・日本史辞典』巻末資料「近世米価表」「金銀銭対照表」を参照した。角川書店 1966
注25　注１文献にも４か所記載されている。
注26　注７に同じ。

（貨幣関係　参考文献）

1. 小川浩編『増補改訂　古貨幣価格図譜』日本古銭研究会 1974
2. 穴銭堂版『東洋古銭図録』上・下　穴銭堂刊 1977



篠島出土銭貨と埋納容器

鳳来町出土　銭貨埋納容器

岡崎市舞木町出土　銭貨埋納容器